

フランスの水循環
『レ・ミゼラブル』と下水道

柴田美奈

目次

序論	1
第一章　パリの下水道	
第一節　下水道の始まり	3
第二節　コレラの流行	4
第三節　コレラ終息に向けてのパリ大改造	5
第二章　『レ・ミゼラブル』と下水道	
第一節　作中における下水道の時代設定	8
第二節　ヴィクトル・ユゴーと下水道	10
結論	14
参考文献	15

序論

私は大学1年の時、1884年に造られた日本最古の近代下水道「神田下水」を視察した。東京・神田の多町大通りにあるマンホールの蓋の中に入り、設置されているはしごを使って3mほど降りたところで、視察用にライトアップされた煉瓦造りの卵形下水道と、流れる本物の下水を間近で見ることができた。

図1(神田下水)



<http://www.jswa.jp/suisuiland/1-4.html>

この貴重な経験は、ある人物を連想させた。フランス文学の登場人物の中で最も有名な1人であろう、「ジャン・ヴァルジャン」だ。ヴィクトル・ユゴーの代表作『レ・ミゼラブル』の主人公である。小説、映画、ミュージカル、様々な形で多くの人に知られており、印象的な場面がいくつもある作品だが、ジャン・ヴァルジャンが、暴動で負傷したマリウスを下水道の中へと引きずり込み、彼を背負って出口を探し歩く姿は特に衝撃が大きかった。ジャン・ヴァルジャンは、ジャヴェール警部から逃げ、マリウスを守らなければならないという使命感を持っており、必死な思いで下水道の中へと入っていった。もちろん私は誰かに追われていたわけでも、人を背負っていたわけでもないが、強く印象に残っていた彼の姿を神田下水の内部で思い浮かべた。

私は『レ・ミゼラブル』を、まず2012年版の映画で知った。下水道の場面は、スクリーンから汚水の匂いが漂ってくるのではないかと思うほど、黒い泥や浮いているゴミ、吸いたくないと思わせる重苦しい空気がわかりやすく描かれていた。映画の下水道の場面はたった2分ほどしかない。下水道に入り込んだ直後にテナルディエに遭遇し、マリウスの指輪のやりとりをした後すぐに出口の方角を教えてもらう。その方角に進む途中、誰一人として見つかることなく無事に地上へと脱出し、そしてあっという間にジャヴェール警部に見つかる、というかなり速い展開であるが、それでも印象に残った。現代の日本に生きる私にとって、大怪我を負い意識が朦朧としている人を背負って汚水の中を歩き回することは、非現実的に感じたからだ。

この下水道の場面は、1832年の設定である。マリウスは、6月5日から6日にかけて起

きた六月暴動で負傷したとされている¹。ここで、疑問が生まれた。1832年は、日本で例えると江戸時代の天保3年だ。国が違うとはいえ、神田下水が誕生する50年以上も前の時代に、映画で描かれているような立派な卵形下水道が存在したのだろうか。また、この年はフランスでコレラが大流行した年である。コレラが流行するということは、街の衛生を保つ下水道整備が行き届いていなかったのではないか。映画と矛盾している点がいくつかあるのではないかと不思議に思った。そこで、実際のパリの下水道はどのように始まり、フランスの水循環はどう進歩したのかを詳しく調べたいと思った。また、私は神田下水を視察した後、約1年間にわたり日本の上下水道、水循環について勉強を重ねた。しかし、海外の下水道についてはほとんど触れたことがなかったため、詳しく学びたいと思い、テーマ設定をした。

小説でユゴーは、ジャン・ヴァルジャンの下水道内部での様子や歩いた道順を、地名などを記して細かく説明しており、映画には無い緊迫した場面もある。それだけではなく、小説であるにも関わらず、まるで論文のようにパリの下水道について長々と記している。下水道の古い歴史、現在までの進歩、これからの進歩についてなど、自分の意見や批判を交えながら述べている。そこで、ユゴーは下水道について細かく述べることで、読者に何を伝えたかったのかについても疑問を抱き、考えたいと思った。

まず第一章では、パリの下水道の始まりとその後の進歩過程、コレラの発生、そしてナポレオン三世が命じたパリ大改造を下水道に焦点を当てて述べる。第二章では、作中における下水道の時代設定や場면을考察し、ヴィクトル・ユゴーが読者に伝えたかったメッセージを考えていきたい。

¹ ユゴー著 / 佐藤朔訳：『レ・ミゼラブル』(五) 新潮社 1967年 p. 157.

第一章 パリの下水道

1. 下水道の始まり

中世のパリは、汚泥の街だった。人々は首都の衛生を考慮しておらず、全てを道に捨てるのが当たり前だった。3回、「水にご注意！」と大声で叫び、お構い無しに窓から汚水を捨てていた。パリにフランス最初の下水道が誕生したのは、1374年である。下水道と言っても、当時のパリ市長ユーグ・オブリオが、メニルモンタン川に流入していたモンマルトル通りの大きな溝に蓋を掛けて設置した簡単なもの、とされている。1605年には、当時のパリ市長フランソワ・ミロンが、フランス最初の暗渠式下水道である、ポンソー下水管を設置する。簡素な造りであったため終末処理が未整備であったが、パリ市民は下水道にゴミも捨てた。大量投棄による詰まりが原因で下水道は正常に流れなくなった。それは街全体を悪臭で満たすほどだった。メニルモンタン川は、15世紀から17世紀にかけて投棄された汚物により埋まってしまった²。このことから、街の衛生環境の劣悪さを想像することができる。その後1740年頃、機能を失ったメニルモンタン川に並行した地下に、「環状下水道」が誕生する。輪っかのような円形の作りであり、これが、ジャン・ヴァルジャンがマリウスを背負って逃げたとされている下水道の形である。下水道は少しずつ進化していたが、技術的には未発達だった。

1805年、そんなパリの下水道を自ら調査したいと願い出たピエール・エマニュエル・ブリュヌゾーという男がいた。『レ・ミゼラブル』の中で、内務大臣から「帝国で最も勇敢な者」とナポレオン・ボナパルトに紹介される、あの人物である³。パリの公共事業検査官であった彼は、1805年から1812年までの7年間調査を行った。ユゴーは作中、ブリュヌゾーの調査について次のように述べている。

前進は困難だった。おりるための梯子が三フィートも泥の中にもぐることもさへ珍しくなかった。角灯は毒気のために消えそうになった。ときどき気絶した人夫が運び出された。ところどころ絶壁があった。地盤がぐずれ、敷石が落ちて、下水道が古井戸に変っていた。しっかりした足場はなかった。[中略] 壁はところどころ、不格好な、腫物みたいな菌のようなもので覆われ、この息もつけぬ場所では、石まで病気がかかっているようだった⁴。

ブリュヌゾーの下水道調査がいかに過酷であったかがわかる内容である。この衛生環境の中、彼が地上に生きて帰ってこられたことが奇跡のように感じられる。ブリュヌゾーは大

² 松井道昭著：『フランス第二帝政下のパリ都市改造』日本経済評論社 1997年 p. 9.

³ ユゴー著 / 佐藤朔訳 前掲書 p. 147.

⁴ 同書 p. 148.

事業を計画し、指揮を執った。

一八〇八年には、ポンソーの土台を深くし、四方に新水路をひらき、一八〇九年にはサン・ドニ通りの下をイノサン広場の噴水まで、一八一〇年にはフロワマントー通りの下とサンペトリエールの下に、一八一一年にはヌーヴ・デ・プチ・ペール通りとマイユ通りとエシャルブ通りとロワイヤル広場の下に、一八一二年にはペー通りとショセ・ダンタンの下に、下水道を拡張した。同時に網の目全体を、消毒し、浄化した⁵。

上記の内容だけ見ると、パリの下水道はブリュヌゾーによって正体が明かされ、すっかり整備が整い、街の衛生環境が徐々に解決されるように感じる。しかし実際は全く違った。たしかにブリュヌゾーは調査を行い、一部を消毒、浄化したが、近代下水道を完成させたわけではない。下水道が今日の状態まで大きく進化したのは、「コレラの大流行」が理由であった。

2. コレラの流行

コレラとは、国語辞典には「コレラ菌の感染による。菌が水や飲料物とともに口から侵入して発病する。嘔吐と激しい下痢を繰り返し、水分が失われて衰弱をきたし、呼吸困難になる⁶」とある。流行の原因の一つは、パリへの人口集中とされている。1801年に54万6856人だったパリの人口は、1836年のルイ・フィリップ王時代には89万9313人、二月革命が起きた1848年には105万3897人に達した。つまり、19世紀の前半だけで人口は約倍の数になった⁷。人口が増えたことで、上水の需要が高くなった。当然それに比例し、下水の量も増えた。それまでパリ市民の多くは、セーヌ河の水を汲んで売り歩く、水売り人の水を頼りに生活をしていた⁸。現代、私たちの一日の水消費量は、家庭内で一人約220リットルほどだが⁹、この当時のパリは上水が不足した状態が続いていた。そうなるに仕方なく、流域の汚物が流れ込む河川の水を使わざるを得なくなった。こうして使った水が、まだ整備が不完全な下水道を通り、セーヌ河へと流れ、水の悪循環となった。当時セーヌ河の水は、パリに住む人々の生活を支えていた。飲み水、水浴びの水、洗濯の水となり、また、食料である魚が生きる水であった¹⁰。そのセーヌ河が人口増加により激しく汚染され、これが、コレラの大流行に繋がった。

⁵ 同書 p. 151.

⁶ 『日本国語大辞典 第二版 第五巻』小学館 1972年 p. 1138.

⁷ 松井道昭 前掲書 p. 73.

⁸ 齋藤健次郎著：『物語 下水道の歴史』水道産業新聞社 1998年 p. 57.

⁹ 東京都水道局 <https://www.waterworks.metro.tokyo.jp/faq/qa-14.html>

¹⁰ 佐川美加著：『パリが沈んだ日 セーヌ川の洪水史』白水社 2009年 p. 28.

1832年、パリでのコレラによる死者数は、1万8402人と記録されている¹¹。当時、病気発症の原因については、二つの説があった。一つ目は、毒で汚染された河川や沼、湿地などが発する「毒気（ミアスマ）」が原因であるとし、人がそれに触れたり吸い込んだ時に病気になるという考え、二つ目は、菌を持った人から人へ移る「接触性伝染体（コンタギオン）」という考えである。「誰かが毒を撒き散らしたせいだ」という噂も流れ、疑われた歩行者の少なくとも5人が群衆に襲われ殺される、という事件も起きた¹²。そのような状況の1849年、バイエルン王国政府コレラ対策委員会の一員であったマックス・フォン・ペッテンコーフェルという人物が、コレラ発症の原因についての研究に着手した。彼の分析結果は、「コレラの流行は河川下流の低湿地から広がっていることから、コレラ特有の下痢便などの汚物が土壌を汚染し、そこから有毒ガス（ミアスマ）が発生し、空中に立ち込め、人に伝染する」というものだった。この当時の医学水準では、病的に完全に解明されているわけではなかった。しかし、低湿地の土壌の汚染が毒気発生に繋がるため、そうさせないためには、生活排水や産業排水の排除が必要であり、汚水の排除を目的とする上下水道整備の重要性を主張した¹³。

ほぼ同じ頃、ペッテンコーフェルとは正反対の意見が上がった。ロンドンの医師、ジョン・スノウの仮説で、コレラ流行の原因は上水道にあるというものだった。上水か下水か、相反する意見は大論争へと発展した。しかし明確な答えは証明されず、どちらも整備を急がなければならなかった¹⁴。このような中、改善に向けて立ち上がった人物が、1852年に皇帝に即位したナポレオン3世である。彼が権力の座についた頃、パリの道路には、中央部が低くなっているところに生活排水が流れており、街角ごとに汚物の山ができていた。疫病の発生が当然のように感じてしまうほど、不衛生な環境だった¹⁵。

3. コレラ終息に向けてのパリ大改造

ナポレオン3世には、老朽化し非衛生的な低所得者階級の人々が住む家を取り壊す、という目的の他、上下水道設備や公園などの公共施設を整え、パリを近代都市に造り替えるという意図があった。彼は19世紀前半のフランスの政治的争いのために、生涯の半分を国外で送ったが、その亡命生活の期間にも祖国の首都のあるべき姿を構想しており、いつか自分が政権を握った時、必ず実現させようと願望を胸に秘めていた¹⁶。

このパリ大改造を行うために、当時ジロンド県知事を務めていたジョルジュ・ユジェー

¹¹ 齋藤健次郎 前掲書 p. 63.

¹² 同書 p. 64-66.

¹³ 『水のFORUM』Volume10 特集 「下水 その先に東京湾」NPO 法人水のフォーラム事務局 2009年 p. 8.

¹⁴ 同書 p. 8.

¹⁵ 松井道昭 前掲書 p. 83.

¹⁶ 同書 p. 95.

ヌ・オスマンを、パリを統括するセーヌ県知事に任命した。1853年にセーヌ県知事に就任したオスマンは、パリ市長も兼務した。彼はかつて、ヴァール県、ヨンヌ県の知事を務めていたこともあり、行政官としての実力を持っていた。また、オスマンが政治に関与していなかったという点が重要であり、純粹に行政的視点からのみ考え、都市計画を実行に移すことができたとされている¹⁷。

オスマンはセーヌ県知事任命式に参加するため、ナポレオン 3 世の離宮サン＝クルーを訪れた。そこでナポレオン 3 世は、自らの構想を記したパリの地図をオスマンに示した。この地図を、その後も色々な人物に見せていたと言われている。ナポレオン 3 世は、パリの改造計画を練ることを趣味としていた。皇帝の自室には至るところに地図や計画の書類が撒き散らされていた。オスマンに見せた地図も、その中の一つであったとされている¹⁸。ナポレオン 3 世に真の情熱がなければ、ここまで計画を練ることに没頭できなかつただろう。彼の熱意を受けたオスマンは、前述の通り、行政に関しては経験と能力に長けていたが、都市計画においては知識がほとんど無かった。そのため、専門家の選抜を行い、専門的なことは全てその人たちに任せることにした¹⁹。

上下水道の実務上の責任者に選ばれたのは、マリー・フランソワ・ユジューヌ・ベルグランだった。彼は理工科学校（エコール・ポリテクニク）、また国立土木学校を経た後、橋梁・道路公団に所属していた土木技術者だ²⁰。出身校はどちらもグランゼコールの一つで、トップクラスのエリート養成機関である。オスマンとベルグランの出会いは、オスマンがヨンヌ県知事を務めていた頃に遡る。オスマンがピレネーの町を訪れ、水道事業の視察を行った。その事業の責任者がベルグランであった。彼が供給している水源の水理学的な解説を、オスマンが求めたのであった。その翌日、オスマンがワッシーのセメント工場を視察した。ベルグランはその視察に随行した。この際も、オスマンはセメントの原料となる岩石の性質や、この地方の地層を通る水道水源についての質問をした。ベルグランは全て丁寧に説明し、この一連の出来事が、オスマンが彼の実力と学問に対する熱意を認めるきっかけとなった。2人が出会った時、ベルグランはまだ無名であったが、オスマンにより大事業の責任者に選抜されたことで、後世に名を残す人物となった²¹。1852年、ベルグランはセーヌ河下流航行事務所の主任技師となり、セーヌ河下流の水源開発に必要な水源の水量と水質の調査に当たった。1855年には、上下水道近代事業の責任者となり、下水道基本計画を立て、オスマンに提出した。翌年には計画が議会で承認され、実施に移された²²。

まずベルグランは下水道の断面を馬蹄形にし、排水溝脇の点検歩廊からの高さを 2m 余りに統一した。このようにしたことで、労働者が、立ったまま排水溝の汚水をボートや底浚

¹⁷ 同書 p. 138-139.

¹⁸ 同書 p. 96-97.

¹⁹ 同書 p. 148.

²⁰ 齋藤健次郎 前掲書 p. 69-73.

²¹ 同書 p. 69-70.

²² 同書 p. 75.

え機で清掃できるようになった。次に、多くの準幹線の増設を行った。ドブ川となっていた市内の小河川を下水道幹線へと転用した。例えば、ビエーヴル川である。ヴェルサイユ近郊に水源を持つこの川は、かつては美しい水が流れていた。パリの上水道の水源候補にもあがったほどだったが、やがて沿岸に建った町工場から排水が流れ込むようになり、セーヌ河汚濁の原因の一つとなってしまった。これを下水道に転用して造ったビエーヴル準幹線を、サイフォンで右岸のコンコルド広場下のアニエール幹線に接続させ、そこから直線で5km、蛇行するセーヌ河沿いでは20km離れたアスニエール村まで大幹線下水道を建設した²³。総延長は600kmにもなった。1861年に完成したこの下水道は、21世紀の現在も使われている²⁴。

下水道が完成した地区の住民には、効果を確認するために、排水を下水道に流すことが義務付けられた。雨水、家庭排水、工場排水、道路の洗浄水など、パリ市内で発生する排水の全てが流し込まれた。しかし、し尿の受け入れは拒否とした。下水道内部で、清掃や保守の作業を行うことを前提として造られたパリの下水道が、し尿によって汚れることをオスマンが嫌ったからだ。パリでやっと下水道にし尿を流すことが認められたのは、下水処理が確実に行えるようになった1880年、または1886年と言われている。水洗トイレの使用が認められ、8万5千以上もあった汚水溜めはようやく街から姿を消すことができた²⁵。

近代下水道が普及した直後の1866年にも、コレラは発生している²⁶。このことから、下水道普及によりすぐに衛生環境が良くなったとは言えない。しかし、長い時間をかけて有能な人物たちが行った下水道大改造が、パリの水循環改善の大きな一歩となったことに違いはないだろう。

²³ 松井道昭 前掲書 p. 242-248.

²⁴ 『水の FORUM』Volume10 特集「下水 その先に東京湾」 p. 9.

²⁵ 齋藤健次郎 前掲書 p. 79-84.

²⁶ 『水の FORUM』Volume9 特集「緑のダム・都市のダム」NPO 法人水のフォーラム事務局 2008年 p. 30.

第二章 『レ・ミゼラブル』と下水道

1. 作中における下水道の時代設定

まず、映画における下水道の描写を考える。序論で述べた通り、『レ・ミゼラブル』の下水道の場面は 1832 年 6 月 6 日の設定であるが、2012 年版の映画では、下水道内部が壮大に描かれている。

図 2 (DVD より)



図 3 (DVD より)



図 2 の通り、天井はジャン・ヴァルジャンの身長をはるかに超えている。また、図 3 の通り、石がびっしりと重なり合う卵形状のアーチがいくつもあり、内部の広さを感じることができる。ユゴーは作中、当時の下水道についてこう述べている。

1832 年のパリの下水道は、今日の状態にははるかに遠かった²⁷。

今から 30 年前、6 月 5 日、6 日の反乱当時には、下水道は、多くの場所で、まだほとんど昔のままだった。[中略] 昔ながらのゴシック式下水が、まだ厚かましく口をあけたままだった。それは覆いのある、と

²⁷ ユゴー著 / 佐藤朔訳 前掲書 p. 157.

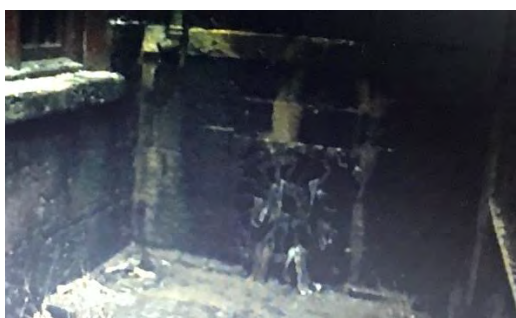
きには車よけの石で囲われた、記念碑的な厚かましさをそなえた、巨大な石の穴だった²⁸。

私が疑問に感じた通り、これらの文から、2012年版の映画で描かれている壮大な下水道は、現実とは異なることがわかる。また、映画に登場する「下水道の入り口」の描かれ方に注目をした。現代、下水道の入り口と聞いて多くの人が思い浮かべるのは、地面にはめ込まれた「マンホール」ではないか。マンホールの蓋を開ければ下水道内部へ入ることができるという事実は、おそらく誰もが知っていることだろう。小説でジャン・ヴァルジャンが下水道の入り口を発見する場面は、以下のように記されている。

一つの鉄格子が地面と水平に、平たくおかれているのを見つけたのである。[中略] 暖炉の煙突か、貯水槽の管のような、暗い入口が見えた²⁹。

これがマンホールであるとは言えないが、地面と平行している点は、現代私たちが想像する下水道の入り口と共通していることだ。しかし映画は小説とは異なり、ジャン・ヴァルジャンは地面と平行した場所から入ったのではない。建物の下部に造られた鉄格子を自力で外し、その先にある円形の穴から中へと入っていったのである。

図4 (DVDより)



映画でわずか数秒しか映らない図4の鉄格子を、一瞬で下水道の入り口と捉えられる人は少ないのではないかと。映像化した際、ジャン・ヴァルジャンが鉄格子を外して入った先は下水道である、ということを瞬間的に伝えるため、下水道内部を誇張して描いたのではないかと考えることができる。

次に、小説における時代設定を考える。ユゴーは、7年間にわたるブリュヌゾーの下水道調査報告書を見て、ジャン・ヴァルジャンが逃げ回る道筋を書いたと言われている³⁰。たしかに、ブリュヌゾーの調査内容を反映させた箇所がある。例えば、環状下水道の場面だ。

突然彼はめりこむ。五、六センチめりこむ。たしかに道筋がよくない、方向を見定めようとして立ち止

²⁸ 同書 p. 157-158.

²⁹ 同書 p. 132-133.

³⁰ 齋藤健次郎 前掲書 p. 86.

まる。ふと足もとに目をやる。足が隠れている。砂に覆われている。砂から足を引出し、引返すつもりで、うしろに向くと、前より深くめりこむ。[中略] 恐ろしい場所に立っていることを覚り、言いようのない恐怖にとらわれる³¹。

ブリュヌゾーが経験した足場の悪さが、わかりやすく表現されている。しかし、もしブリュヌゾーの報告書を小説で忠実に再現していたら、ジャン・ヴァルジャンは最初からもっと険しい道を進まなければならなかっただろう。

感じられるのは、足もとが固いということ、ただそれだけだったが、それで十分だった³²。

ジャン・ヴァルジャンは下水道に入っただけの時には、固い地面を歩いている。泥ではなく、敷石が続いているとも記されている。ブリュヌゾーの報告書には、しっかりとした足場は見つからなかった、と記録されていたため、ユゴーは報告書をそのまま引用したのではなく、進歩した下水道と融合させていることがわかる。ユゴーは完成した近代下水道の内部を細かく研究し、それを作中に取り入れたのではないかと考えた。しかしここで、『レ・ミゼラブル』の出版年と下水道完成の年を比較してみる。『レ・ミゼラブル』は1862年3月から6月にかけて出版され、作品自体は1861年6月にはほぼ完成していたと言われている³³。下水道の主要幹線であるアニエール大幹線がようやく完成したのは、1861年である。つまりユゴーは、近代下水道の完成よりも先に『レ・ミゼラブル』を書き上げたことになり、小説に登場する下水道の時代設定は、全てが正確な情報ではないと捉えることができる。

2. ヴィクトル・ユゴーと下水道

ユゴーは、ジャン・ヴァルジャンが逃げ回る架空の場面を書く前に、パリの下水道の「進歩」についての章を設け、ブリュヌゾーなど実在する人物の名を挙げて長々と記している。

『レ・ミゼラブル』は論文ではなく小説なのだから、ユゴーの想像で下水道内部の描写を行なったとしても、読み手はそれほど違和感を感じないだろう。単にジャン・ヴァルジャンが下水道の中を逃げ回るといふ斬新な展開にしたかったのであれば、下水道について論じること、ブリュヌゾーの名を挙げる必要もなかったはずだ。ユゴーが下水道の「進歩」について述べたことは、どのような意味が込められているのか。ユゴーは『レ・ミゼラブル』の中で、下水道について述べる前に、「人類の進歩」について次のように述べている。

³¹ ユゴー著 / 佐藤朔訳 前掲書 p. 183.

³² 同書 p. 162.

³³ 西永良成『「レ・ミゼラブル」の世界』岩波新書 2017年 p. 203.

進歩とは人間の在り方である。人類全般の生命が進歩と呼ばれ、人類の集団的な歩みが進歩と呼ばれる³⁴。

絶望する者は、正しくない。進歩は必ず目ざめる。[中略] 普遍的平和にほかならない秩序が確立されるまでは、調和と一致が君臨するまでは、進歩は段階として革命を伴うであろう³⁵。

ユゴーは「進歩」に対して上記のような思想を持っていたことがわかる。またユゴーは、『レ・ミゼラブル』における「進歩」について、次のように述べている。

私が今語っているような戦闘は、理想への痙攣にほかならない。拘束された進歩は病的であり、悲劇的な癲癇を起こすものである。われわれは、進歩の病気、つまり内乱に、話の途中出会わなければならなかった。それは、社会的断罪を受けた一人の男を軸とするドラマの、進行中でもあり、幕間でもある、宿命的な段階である。そのドラマの真の題名は、「進歩」である。進歩！私がしばしば発するこの叫びが、私の全思想である。そして、ドラマがここまできた以上、そこに含まれる観念は、まだこれから幾つもの試練を受けなければならない³⁶。

つまり、『レ・ミゼラブル』はユゴーの全思想である「進歩」が軸となっている作品であり、「進歩」の過程は楽なことばかりではなく、試練を伴う、と捉えることができる。下水道の場面においては、現実の出来事をしっかりと述べた後に空想の物語を描くことで、実在するブリュヌゾーと架空のジャン・ヴァルジャンが重なり合う効果を出している。このことは、劣悪な衛生環境だったパリを変えるために下水道を大改造した人間の努力や苦勞、精神的な「進歩」、そしてパリの技術の「進歩」を、ジャン・ヴァルジャンを通して伝えたかったのではないか。しかし『レ・ミゼラブル』の中で、下水道の場面だけが歴史的事実を述べている箇所というわけではない。ユゴーは長い小説の中で、「一八一七年に」、「ワートルロー」、「余談」など、事実を記す章をいくつも設けている。つまり、下水道の進歩だけが、ユゴーが描く「進歩」に重なり合っているのではない。だが、わざわざ下水道について述べるだけの章があるということは、ユゴーにとって下水道は重要な存在であったのではないか。

作中ユゴーは、7年間に渡り下水道調査を行ったブリュヌゾーについて次のように述べている。

昔の下水道と今の下水道の間には、革命がある。誰がその革命を起したのか？世人が忘れている人、前に名をあげた人、ブリュヌゾーなのである³⁷。

³⁴ ユゴー著 / 佐藤朔訳 前掲書 p. 106.

³⁵ 同書 p. 106.

³⁶ 同書 p. 114・115.

³⁷ 同書 p. 154.

『レ・ミゼラブル』第5部第2章第3節のタイトルは、「ブリュヌゾー」である。ユゴーが記しているように、ブリュヌゾーは下水道の革命児であり、彼そのものが「進歩」だと捉えることができるのではないか。19世紀前半に、ブリュヌゾーのように自ら名乗りをあげて過酷な調査をしようとした人は少なかった、もしくは他にいなかったらう。技術が進んだ現代においても、下水道の世間からの注目度は高いとは言えない。災害などで使用できなくなった際に、その時だけ重要性に気付く、というのが現実だ。現代の下水道は、汚水処理の過程で発生する汚泥などのエネルギーを利用しバスや電車を走らせることができ、さらには汚泥を、野菜や果物などの作物を作る肥料に生まれ変わらせる「ビストロ下水道」と呼ばれる技術がある。こうした様々な可能性を持っていながらも、普段目に見えない下水道は、なかなか注目を浴びることがない。衛生環境が悪かった19世紀前半、市民の多くから、下水道は汚れた水やゴミが流れる場所という認識をされ、現代よりも避けられていた存在であったらう。そんな時代に、ブリュヌゾーは自ら下水道に入っていった。前述したとおり、ユゴーは、絶望する者は正しくない、と述べている。絶望してもおかしくない衛生環境の中、強い精神力を示したブリュヌゾーの行動を細かく記し、その後には彼とジャン・ヴァルジャンを重ね合わせて物語を描くことで、彼の努力が忘れ去られないようにしたかったのではないか。現在パリのアルマ橋のもとにある下水道博物館には、『レ・ミゼラブル』と下水道の関係が書かれた大きなパネルが設置されている。そこには、ユゴーとブリュヌゾーは友人関係だった、と記されている³⁸。ブリュヌゾーが下水道調査を始めた1805年は、ユゴーはまだ3歳であるため相当な年の差があるが、友人である彼の行動に感銘を受け、彼こそが「進歩」だと考え、小説に残したのではないかと捉えることができる。

ユゴーは作中、パリの下水道を褒め称えているだけではない。むしろ、もっと有益な使い方があはずだ、という批判から書き始めている。

パリは年に二千五百万フランの金を水に捨てている。これは比喩ではない。どうして、どんなふうにも？ 昼も夜もである。なんの目的で？なんの目的もなしに。どういう考えで？なんの考えもなしに。何をするために？なんのためでもなく。どんな器官を使って？そのはらわたを使って。はらわたとは何か？パリの下水道である³⁹。

肥料の中で最も栄養分が多く有効なものは人肥である、とユゴーは述べている。このことはフランスより中国の方が先に気付いており、中国では再生可能エネルギーとして人肥を使うことを既に行なっていた。フランスの知恵の遅れについて、恥ずかしいとも記している。街に積まれたゴミの山、敷石に隠れた地下の泥の汚れは、単なる不必要なものではなく、草花が咲く牧場や、獲物、家畜になりうるエネルギーであり、それは最終的に人々の健

³⁸ 『水のFORUM』Volume9 特集「緑のダム・都市のダム」 p. 32.

³⁹ ユゴー著 / 佐藤朔訳 前掲書 p. 134.

康や喜び、生命に繋がることを意味する、と主張している⁴⁰。

それを大きな坩堝に入れよ。そこから富が出てくるだろう。野を肥やすことは、人間を養うことになる。この富を無駄にすることも、また私の考えを笑うことも自由である。だが、それはこのうえなく無知をあらわすものだろう⁴¹。

パリの大乱費、その驚異的な歓楽、そのフォーリー・ボージョン、その饗宴、両手でばらまく金づかい、豪華、贅沢、華美は、下水道である、と言うことができよう⁴²。

下水道に流れていく水は多額の富に生まれ変わる。しかしフランスは年々無駄にしており、経済の活性化ができていないことを批判している。ユゴーは、自分の友人が進歩のきっかけを作ったパリの下水道に、誇りを持っていたことだろう。しかし、素晴らしい下水道技術がありながら、それを有能に使おうとしない人々に対しての不満や怒りが募り、今後の改善、そして「進歩」への期待を込めて小説に記したのではないか、と考えることができる。

もしユゴーが『レ・ミゼラブル』で下水道を取り上げず、ジャン・ヴァルジャンをその中で歩かせていなければ、パリに下水道博物館は建たなかったかもしれない。多くの人があまり注目しない下水道世界を描いたユゴー自身も、「進歩」そのものと捉えられるのではないか。

⁴⁰ 同書 p. 134-135.

⁴¹ 同書 p. 135.

⁴² 同書 p. 137.

結論

第 1 章では、今日のパリの下水道は、パリの街の不衛生な環境から大流行したコレラをきっかけとして、ナポレオン 3 世をはじめとする多くの有能な人物によって基盤が造られたことを述べた。第 2 章では、ジャン・ヴァルジャンが歩いた下水道は、実際の 1832 年のものではなく、時代設定は正確ではないということがわかり、また、『レ・ミゼラブル』の真のテーマである「進歩」について、下水道場面と照らし合わせながら考え、ユゴーが下水道を通して残したかったメッセージについて論じた。

『レ・ミゼラブル』は、一見、小説の様式であるが、本論の第 2 章で述べた通り、ユゴーは歴史的事実をいくつも述べており、叙事詩であると捉えることもできる。単なるジャン・ヴァルジャンの物語ではなく、様々な時代背景を取り入れることで、一つの時代を描いたとされている⁴³。

上下水道について学んだ経験がある私にとって、『レ・ミゼラブル』における下水道の場面は、見逃すことができない箇所であった。2012 年版の映画では、小説で描かれている内容が大幅にカットされており非常に残念であるが、ジャン・ヴァルジャンが下水道を歩く姿は、この作品の有名な場面の一つとして広く知られている。このことは、今後の下水道広報の力になるのではないかと私は感じた。日本下水道協会によると、現代の日本の下水道普及率は約 80%で、白百合女子大学がある東京都は 99.5%であり⁴⁴、私たちは日々当たり前のように下水道を使用できている。しかし、普段目に見えない場所にある下水道はあまり注目をされていないことが現実である。下水道が果たしている役割はいくつもある。しかし、その役割を理解できている人は少なく、また、下水道が生活を支えてくれているということへの感謝を、人々は忘れてしまっているように感じる。世間一般の下水道のイメージは、「汚い」、「暗い」などマイナスな考えが圧倒的に多い。この印象を変え、世間の下水道世界への関心を高めるためには、良いイメージを持った大きなインパクトが必要であり、ジャン・ヴァルジャンはまさにその存在になれるのではないか。私は、『レ・ミゼラブル』の小説を通して下水道への興味を持つ人が 1 人でも増えたら、という思いも兼ねてこの論文を執筆した。もし本当に、ジャン・ヴァルジャンが下水道広報に役立つ存在になることができたとしたら、彼はもちろん、『レ・ミゼラブル』は、また「進歩」を遂げることになるだろう。

⁴³ 同書 p. 454.

⁴⁴ 日本下水道協会 <http://www.jswa.jp/rate/>

参考文献

- 齋藤健次郎著：『物語 下水道の歴史』水道産業新聞社 1998 年
佐川美加著：『パリが沈んだ日 セーヌ川の洪水史』白水社 2009 年
西永良成『「レ・ミゼラブル」の世界』岩波新書 2017 年
『日本国語大辞典 第二版 第五巻』小学館 1972 年
松井道昭著：『フランス第二帝政下のパリ都市改造』日本経済評論社 1997 年
ユゴー著 / 佐藤朔訳：『レ・ミゼラブル』(五) 新潮社 1967 年

・冊子

- 『水の FORUM』Volume10 特集「下水 その先に東京湾」NPO 法人水のフォーラム事務局 2009 年
『水の FORUM』Volume9 特集「緑のダム・都市のダム」NPO 法人水のフォーラム事務局 2008 年

・インターネットサイト

- 東京都水道局 <https://www.waterworks.metro.tokyo.jp/faq/qa-14.html>
日本下水道協会 <http://www.jswa.jp/rate/>
日本下水道協会 <http://www.jswa.jp/suisuiland/1-4.html>

・映像

- “Les Misérables THE MUSICAL PHENOMENON ジュネオン・ユニバーサル・エンターテイメント 2012 年